李仙碍建言第五章

八尾正文譯

128

114
A4434
4

大正十一年四月
大隈侯爵邸寄贈

飛鳥井家

第五章

日本ノ富源ヲ起スノ方策ヲ論ス

余カ前章ニ概論セシ如ク國ノ富ハ單ニ土地㊀ヨリ生スル者トナス時ハ則チ華士族ヲシテ荒野ノ開墾ニ從事セシメ其効ヲ治メシムルヲ以テ最モ適當ノ任トナスノミナラス復タ恐ラクハ此他ニ求ムルノ良策ナカラン試ミニ日本ノ総地坪ヲ計算スルニ蓋シ蝦夷地ヲ除クノ外二千七百九十四万九千七百七十九丁㊁アリ就中大藏省ノ記録ニ據レハ則チ其耕鋤シタル土地四百

大藏省

○九万千百十三丁而シテ人民ノ所有ニシテ之レカ租税ヲ納ル、所ノ荒蕪ノ地三十二万五千三百三十四丁餘アリ其他二千三百五十三万三千三百三十二丁ハ皆ナ官有地ニ属スルナリ余輩ハ當國ノ事情ニ就テ特リ輙ク旅客ノ筆記ニ係ル所ノ説ヲ信シテ以テ全國ノ地坪ノ中幾何ノ部分ハ耕種ニ適スヘキヲ乎將タ牧畜場ニ用フヘキヲ乎ヲ明瞭ニ臆断シ得ル能ハズ然リト雖モ余輩ハ茲ニ日本ト能ク其地勢ヲ同フスル仁國即チ狼利典群島ニ就テ之レカ想像ヲ起ス可シ夫レ「エンサイクロペヂヤブリタニカ」ニ依リテ之レヲ観レハスコットランド國ノ總地坪中其耕鋤シタル土地ハ十ノ二六半ニタ荒蕪ノ土地ハ十ノ七三半ニ居ル蓋シスコットランドノ耕地中其半ハ實ニ牧場ナリト雖モ悉ク山嶽ニ非ス且ツ禾穀ノ耕種ニ適ス可キヲ知ルカ故ニ余ハ姑ク之レヲ耕地ノ部中ニ属セリインゲランド及ヒウエールスニ至ラハ耕地ノ部分十ノ七七半ニシテ荒蕪ノ部分ハ十ノ二二半ニ居ルナリ又アイルランドニ至リテハ耕地十ノ七一四分ノ

一ハ山丘泥　ハ十ノ二六半ニ居リ湖水又
タ其二ト四分一ヲ占メリ
右ニ陳ル所ノ割合ノ圖畫ヲ以テ姑ク正鵠ノ者
トナシ今日本ヲシテイングランド及ヒウェール
スノ耕地開拓ノ較度ニ進マシメントスルトキ
ハ其耕地ノ弐千一百六拾七萬貳千〇七拾八丁
七反二畝ニ及ヒヲ要ス即チ現今ノ耕地ニ増加
スルニ更ニ一千七百五拾八萬〇九百六拾五丁
七反一畝ヲ以テセサルヲ得ス然ルトキハ荒蕪
土地僅カニ六百貳拾七萬七千七百丁トナルナ

リ而シテスコットランドノ耕地ノ富ニ達センニ
ハ其耕地ノ全坪七百四拾万六千六百九十一丁
四反三畝ニ及ハザルヲ得ス即チ現今ノ耕地ニ
増加スルニ更ニ三百三拾壹萬五千五百七拾八
丁四反三畝ヲ以テシ其餘ス所ノ荒地ハ貳千〇
五拾四萬三千百七拾七丁五反七畝トナサヽル
可ラズ若シ又アイルランドトノ比例ヲ保タン
トセハ耕地ヲシテ總坪一千九百九拾貳萬四千
貳百拾七丁五反四畝トナサシムサル可ラス即
チ現今保存スルノ耕地ニ増加スルニ更ニ一

千八百八拾三萬　千百〇四丁五反四畝ヲ以テ
シ荒蕪ノ地ヲシテ八百〇貳萬五千五百六拾壹
丁四反六畝トナサヽル可カラサルナリ
マクヽルローチ氏曰ク　四　スコットランドノ地勢ニ
シテ其富饒ヲ占ムル所ハ終カニ海邊ノ土地ニ
過キス其全國ノ内部ニ至テハ頗ル平坦ナリト
云フベキ所ト雖モ尚ホ丘谷網羅シ地トシテ凹凸
ナラサル所ナキナリ然リ而ノ日本ハ之レニ異
ナリ曾テ其國ヲ行旅シタル識者ノ說ヲ聞ク
日本内部ノ地勢ニ至テハ斯ルスコットランドノ

如キ秋然タル形勢未タ之レアラサル而已ナラ
ズ却テ快哉タル報知ヲ得ルモノ甚タ多シ余又
之レヲデー、ウヰ、アブ、チョーンス氏ニ聞クアリ蓋
シチョーンス氏ハ大貌利典ニ於テ教育ヲ受ケタ
ル人ニシテ能ク大貌利典ノ地勢ヲ暗記スルノ
ミナラズ且ツ日本ノ内部ニ就テモ亦其耕種ニ
適ス可キ乎否ヤヲ檢査センガ為メニ巡行スル
モ已ニ三年其地味ノ如何ヲ熟知スル亦想フ
ヘシ該氏曰ク日本ノ地味ハ其耕耘開墾ニ於ル
ヤハコットランドノ北部ト同日ノ比ニ非スト且

ソロク假令其開墾ス可キ土地ノ幅員ニ於テハ
インギランドクエールス、或ハアイルランドトニ
比較シテ相及バザルトスルモ猶其方法ヲ審案
シテ其盡ス所ヲ盡サハ之レヲ牧場トナスモ亦
耕耘ヨリ收獲スル所ノ利益ト同一ノ富ヲ起ス
可シト又曾テ東京ニ駐滞セシ合衆國公使「チヤ
ルレス、イ、テロング」氏ハ亜米利加西部ノ耕種ヲ
專ラトセル村野ニ在リテ久シク故ニ自ラ其地
質ノ如何ニ就テ能ク其良否ヲ知リ得ルニ至ル
リ而メ亜米利加ノイインジニール職名「ウンサング」

氏ハ曾テ合衆國ノ西部一般ノ地質審査官タル
ノ日實驗シタルヲ以テ其地質ノ事ヲ論スルニ
至テハ恰モ能クヨーロッパ氏ノ見ト相頡頏シ
殆ント相異ナル所ナキハ其報告書中ニ陳述セ
シ所ニ據テ之レヲ知レリ故ニ此數氏ノ旅行ノ
報告ニ擬シテ以テ日本國内ノ牧場ニ適當セル
特別ナル事情ヲ説明セントスルハ余ニ於テ
モ亦タ其タ易シ抑モ特別ナル事情トハ果シテ
何ソヤ即チ其海岸ノ全面ニ沿フテ流ルヽ所ノ
温暖ナル潮流ニ根ス而メ其潮流ヨリ上騰スル

豊饒ナル蒸発氣ノ恰モ夏時ニ方リテ人家ノ氣中ニ包含セル濕氣カ氷ヲ盛レタル玻璃盃ノ周囲ニ凝結シテ滴タルカ如ク（山丘ノ寒冷ナル頂上ニ凝縮シ然ル後チ温暖ヲ含ミタル驟雨トナリ降リテ土地ニ閏澤ヲ加フルノミナラズ土地ニ寄リ物理上ノ之レヲ論スレハ則チ只其南方ニ接近スル所ノ土地ニ限ルヘキ半熱帯ノ氣候ヲ為スアリ故ニ他ノ理由ニ依テ殆ト推考スル能ハサルカ如キ高山高峰ニ於テモ亦植物生長ヲ遂ケシム若其植物生長スト雖モ山脈陸續地勢嶮難ニシテ以テ牛馬豕或ハ羊ヲ豢養スルニ適宜ナラストナス而アレハ則チアンゴラコート（山羊）ヲ豢養スレヲ適當ナス而ノコレヨリ起ル所ノ國益ハ仮令牛馬豕ノ上ニ出テサルモ亦猶羊ヲ牧スルト相等シカルヘシ

若シ夫レ余輩カ前ニ陳述セル數氏カ旅行報告ヲ以テ適宜ノモノトナス時ハ蓋シ日本ノ耕転開拓ノ能力ニ於ケルヤインゲランドトスコットランドトノ間ニ立ツ可シ然ラハ則チ其總地坪ノ六割二分即チ一千四百五十三萬三千八百八

十八丁ハ開墾地成スヿヲ得可シ而シテ其耕
耘開拓ノ地位ニ進歩セント欲セハ日本ハ現ヘ
ニ存在スル所ノ開墾地ノ外尚ホ一千〇四十四万
貳千七百七拾貳丁ノ多キヲ増加セサルヲ得サ
ルナリ
日本ノ富ニ其キタル土地開墾増加ノ方策ヲ具
スルニ當リ余輩ハ先ツ開拓スヘキ宏大ナル地
坪ノ價格ヲ預算ニ亘其地面ヨリ收穫スル所ノ
物産ニ就テ之レヲ審査セサル可ラズ今此條理
ノ公平ヲ得ンガ為メ現今大藏省ノ記録ニ載タ

ル日本全國ノ耕地ヲ二等ニ別チ以テ各同等ノ
比例ナサン而ノ其一ヌ米田（二等ノ内之ヲ上等ト）トナ
シ毎一丁五百三拾壹圓貳拾四錢ト積リ他ノ一
ヲ下等地トナシ毎一丁貳百〇六四七拾貳錢ト
積リ上下其平均ヲ取レハ毎一丁三百七拾九円
拾七錢トナルナリ
而シテ余カ曾テ得ル所ノ確報ニ據レハ不毛ノ
地ハ毎一丁拾四円七拾七錢ノ價ヲ有ス然レバ
一千〇四拾四萬貳千七百七拾貳丁ノ地價ヲ掬
算シテ只一億五千四百貳拾三萬九千七百四拾

貳圓四拾四錢トニルノミ今此一千〇四拾四萬
貳千七百七拾二丁ヲ開拓スルニ彼ノ両國ヲ用
墾セシ所ノ方法ニ倣フ時ハ其費用毎一坪六厘
六毛強或ハ毎一反壹四即チ毎一丁拾四ヲ要ス
而シ尚其他ノ費額ヲ要シテ開墾ノ術ヲ施シ漸
次土地ノ膏腴ニ赴キ極テ耕種ニ適スルノ日ニ
至ラハ毎一丁ノ地價平均三百七拾九四拾七錢
即チ総計三拾九億五千九百五拾七万五千八百
五拾九圓貳拾四錢トナ可シ是時ニ當テ其土
地ノ所産ハ地價百分ノ一、六五トシ其内ヨリ

地租百分ノ三ト耕種費百分ノ二、六五ヲ引去ル
モ尚作主ハ百分ノ六ノ利益ヲ得ヘキナリ
若シ茶「マップル」製絲ノ為ニ要スル樹名藍煙草、
葡萄、砂糖及ヒ樟脳ノ如キ高價ノ産物ヲ盛ンニ
耕種シ且陶器製造ノ為メニ要スル水岸ニ在ル
所ノ陶土ハ勿論其他遙カニ遠隔ノ地ニ在ル所
ノ陶土ト雖モ能ク之レヲ利用スルニ方リテハ
其物産賣捌ノ市場ヲ要スルカ為メニ人民自ラ
内國通運ノ便ヲ開クハ必然ナルノミナラスサ
便開クルニ隨テ利益倍起ル時ハ前書ノ概算ハ

蓋シ實際ノ價位ヨリ遥ニ廉ナルニ至ルヘシ
合衆國及ヒ佛蘭西西國ノ貿易表ヲ披テ之ヲ日
ルニ甲(合衆國)國ノ富ヲ増加セシハ綿、米、烟草ノ
耕種ト坑出ノ鑛金トニ由ル渾テ是等ノ物品ハ
殊ニ外國ノ需用セシ所ノモノナリキ而メ南部
ノ力作人ト「カリフォルニヤ」ノ礦夫等ハ續々之レ
ヲ供給スルヿヲ得テ亦自ラ大利ヲ食ミ且ツ合
衆國ハ外國ノ市場ニ於テ永々是等ノ物品專賣
ノ利ヲ占ムルニ至レリ之レ五大州中何レノ國
ニ比スルモ價ヒ廉ニシテ且ツ其質美ナル品物

ヲ産出スルヲ得タレバナリ抑此物價至廉ナル
ヲ得ルノ理ハ何レノ点ニ在ル乎ヲ尋ヌルニ其
土地ノ膏腴ナルト氣候ノ温和ナルト側ラ南部
諸邦ニ於テ使用セシ奴隷ノ勞費至廉ノ輔ケニ
由レリ彼ノ奴隷ノ至廉ナル賃銀ハ敢テ西部或
ハ北部ノ自由勞役ノ賃銀ト競爭シテ一般賃銀
ノ平均ヲ破リ或ハ之レニ因テ他ノ産業諸課ニ
就テ國中理財ノ體裁ヲ破ルカ如キ競爭ヲ起サ
ヽリシナリ是故ニ千八百五十年ニ於テハ綿、米
及ヒ烟草ノ輸出代價八千五百萬弗即チ輸出總

價額中十ノ六三ニ居リ麥粉、雜穀、乾酪、牛酪、豕脂、タルロー（牛羊類ノ脂）牛肉、豕肉、海軍需用品、此他獸畜蔬菜類ノ輸出ハ總額貳千四百万ニ足ラズ即チ獨リ十ノ一八ヲ占メ諸種製造品ノ如キハ綿布ヲ併セテ只千五百萬即チ輸出總額中ノ一一ヲ保チシノミ又千八百六十年第八回發兌ノ物産表ニ據レハ千八百五十九年ニ輸出シタル綿、米、烟草、及ヒ鑛金ノ價額貳億四千五百万即輸出總額ノ七割三分ニ居リ獸畜及ヒ野菜物ノ類貳千四百萬即總額ノ一割三分ニ居リ諸種製造品（綿布八百萬弗ヲ併セテ）三千万即總額ノ九分ニ居レリ但シ輸出額中獨リ綿ノミヲ以テ壹億六千百萬ヲ占メタリギ」

右ニ陳フル所ノ前轍ハ日本ノ方サニ實踐セサルヲ得サル所ナリ而メ日本ハ茶、生糸、陶器、及ヒ此他一二ノ産物ニ就テハ其地味ト氣候ト両ナカラ他ニ比類ナキ適良ヲ得ルモノナリ況ヤ現今該邦ノ勞費至廉ニ於ケルオヤ輸出貿易ニ於テ其成果ヲ見ルモノハ必ス合衆國ノ綿ニ於ケルト同一般ノ地位ニ居ルハ鏡ニ照シテ見ルカ如

シ然リト雖モ未墾ノ荒野ニ富饒ノ原種ヲ播布
センカ為ノニハ既ニ開ケタルノ地方ヨリ之レ
カ資本ヲ送リテ其開拓ノ費用ニ供セスンハ幾
千百ノ春秋ヲ経過スルモ亦日本ヲシテ合衆國
ノ綿ニ於ケルカ如キノ盛富ヲ致サシムルノ日
未タ之レ有ラサルヲ保スルナリ若シ然ラハ日
本ハ恰モ佛蘭西ガ千八百四十八年以前ニ於ル
カ如ク徒ニ邦内無盡藏ノ富ヲ有シテ猶且ツ之
レヲ活用スルヲ知ラサルモノト異ナル丁ナカ
ルヘシ斯ノ如キ場合ニ當テハ則チ該國ハ一ノ

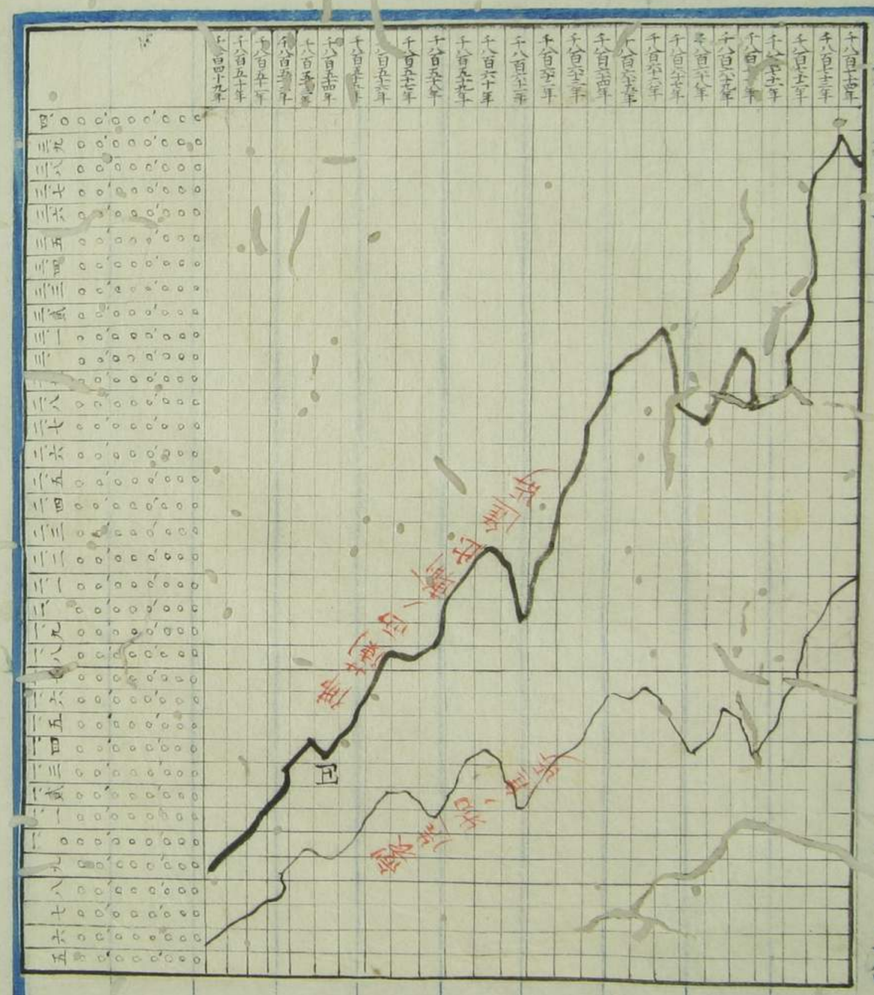
空漠タル小島ニ漂着セシモノト殆ント同一般
ニシテ其破船幾千貫ノ金塊ヲ保藏シ得ルモ猶
其食物ヲ満足セシムンカ為メ交易ノ媒介トシ
テ其金塊ヲ使用セント欲スト雖モ能ハズ腹空
シク咽渇シテ竟ニ餓死ニ至ル災害ヲ免レサル
ヘシ余ガ第二章ニ於テ引用セシ所ノ佛蘭西ノ
駸々乎トシテ富饒ニ至リシモノハ特ニ一千八
百四十八年以来該國内部ノ通運ノ便利俄然ト
シテ開ケタルニ根據ス蓋シ鐵道ヲ開キ宏大ナ
ル汽船會社ノ起リシヨリ佛都ヲシテ百物産出

ノ中心ト之レヲ消糜スルノ萬國ト連接スル媒妙タラシメタリ就中當時工業商事共ニ進歩ノ用ヲ為ス所ノ交易ノ大用具タル金ヲ産出セルオースタラリヤ及ヒカリフォルニヤノ金山ニ航線ヲ開ケリ其後チ電信往復ノ發明アルニ及テ世界ノ人智ヲ一変シテ益々商業ヲシテ頴敏ニ趣カシメタリ是ニ由テ之レヲ観レハ日本國ハ曾テ亜米利加ノ發見アリシ時ト同一般ニシテ即チ今日ヲ以テ建國紀元ノ初期トナス故ニ茲ニ佛蘭西ノ繁榮ノ事ニ就テ記スモノハ若シ

日本カ其前轍ヲ踐ミ駸々乎トシテ進歩シ活眼ヲ通運ノ利ニ注ク時ハ敢テ他ノ各國ニ其富ヲ譲ラサルベシ則チ現時ノ大藏卿大隈重信閣下ノ英断ヲ以テ三菱大會社ヲ結立セシメタルノ擧ハ他日無量ノ効績ヲ顕ハス可キ事必然タリ蓋シ鐵道、道路、運河及ヒ海岸ヲシテ航海ノ危嶮無カラシムルカ如キノ美擧ハ皆是レ物産ヲ起スノ大本原タリ何トナレハ其運搬ハ辨理アルヲ以テ製作所不元品所トヲ互ニ居所ノ離隔ヲ近接スル而已ナラス才智アル人経驗アル人及

ヒ頴敏ナル人等ハ往時里程ノ遠キヲ憂テ以テ
迂遠トナシ絶テ着手セサリシ所ノ事業ヲ奮起
シ得レハナリ是ノ際ニ當テ製作物運搬ノ神速
ナルハ恰モ製造所ヨリ直接ニ消費者ノ手ニ渡
スカ如ク交易ノ用具タル金モ亦隨テ神速ニ運
搬スルヲ得其回着ノ時刻ハ電報ヲ以テ告知ス
ルヲ得ヘシ余ハ此ノ真理ヲシテ益明瞭ナラシ
メンカ為メ佛蘭西ノ物産進歩ノ事情ニ就テ爰
ニ最後ニ版行セシ「フォルムエコノミク」書中ニ
掲ケタル圖ノ一部ヲ記シテ以テ之レカ提要ヲ

示ス可シ蓋シ該図ハ恰モ能ク乗數表ニ類似シ
其毎歳ノ輸出景況ヲ窺知ラントスルニハ縱横
行徑符合ノ点ニ於テ其金額ヲ得可シ則チ此法
ニ因テ一千八百五十四年ノ輸出高ヲ見ント欲
セハ該図ノ頂上ニ記セル同年ノ縱行ヲ引テ輸
出ノ徽号タル黒線ノ下ニ巨字ヲ記セシ隅角マ
テ至リテ止ミ左ニ回リテ金額ノ部ヲ見ヨ乃チ
一千八百五十四年ニ於テ佛蘭西ヨリ外國ニ輸
出セシ物價ハ拾四億フランク以上ナルヲ知ル
他ノ行線ヲ見ルモ亦相然リ


千八百七十年
千八百七十一年
千八百七十二年
千八百七十三年
千八百七十四年
千八百七十五年
千八百七十六年
千八百七十七年
千八百七十八年
千八百七十九年
千八百八十年
千八百八十一年
千八百八十二年
千八百八十三年
千八百八十四年
千八百八十五年
千八百八十六年
千八百八十七年
千八百八十八年
千八百八十九年
千八百九十年
千八百九十一年
千八百九十二年
千八百九十三年
千八百九十四年
千八百九十五年
千八百九十六年
千八百九十七年
千八百九十八年
千八百九十九年
千八百百十年
千八百百十一年
千八百百十二年
千八百百十三年
千八百百十四年
千八百百十五年
千八百百十六年
千八百百十七年
千八百百十八年
千八百百十九年
千八百百二十年
千八百百二十一年
千八百百二十二年
千八百百二十三年
千八百百二十四年
千八百百二十五年
千八百百二十六年
千八百百二十七年
千八百百二十八年
千八百百二十九年
千八百百三十年
千八百百三十一年
千八百百三十二年
千八百百三十三年
千八百百三十四年
千八百百三十五年
千八百百三十六年
千八百百三十七年
千八百百三十八年
千八百百三十九年
千八百百四十年
千八百百四十一年
千八百百四十二年
千八百百四十三年
千八百百四十四年
千八百百四十五年
千八百百四十六年
千八百百四十七年
千八百百四十八年
千八百百四十九年
千八百百五十年
千八百百五十一年
千八百百五十二年
千八百百五十三年
千八百百五十四年
千八百百五十五年
千八百百五十六年
千八百百五十七年
千八百百五十八年
千八百百五十九年
千八百百六十年
千八百百六十一年
千八百百六十二年
千八百百六十三年
千八百百六十四年
千八百百六十五年
千八百百六十六年
千八百百六十七年
千八百百六十八年
千八百百六十九年
千八百百七十年
千八百百七十一年
千八百百七十二年
千八百百七十三年
千八百百七十四年
千八百百七十五年
千八百百七十六年
千八百百七十七年
千八百百七十八年
千八百百七十九年
千八百百八十年
千八百百八十一年
千八百百八十二年
千八百百八十三年
千八百百八十四年
千八百百八十五年
千八百百八十六年
千八百百八十七年
千八百百八十八年
千八百百八十九年
千八百百九十年
千八百百九十一年
千八百百九十二年
千八百百九十三年
千八百百九十四年
千八百百九十五年
千八百百九十六年
千八百百九十七年
千八百百九十八年
千八百百九十九年
千八百二百年
千八百二百一年
千八百二百二年
千八百二百三年
千八百二百四年
千八百二百五年
千八百二百六年
千八百二百七年
千八百二百八年
千八百二百九年
千八百三百年
千八百三百一年
千八百三百二年
千八百三百三年
千八百三百四年
千八百三百五年
千八百三百六年
千八百三百七年
千八百三百八年
千八百三百九年
千八百四百年
千八百四百一年
千八百四百二年
千八百四百三年
千八百四百四年
千八百四百五年
千八百四百六年
千八百四百七年
千八百四百八年
千八百四百九年
千八百五百年
千八百五百一年
千八百五百二年
千八百五百三年
千八百五百四年
千八百五百五年
千八百五百六年
千八百五百七年
千八百五百八年
千八百五百九年
千八百六百年
千八百六百一年
千八百六百二年
千八百六百三年
千八百六百四年
千八百六百五年
千八百六百六年
千八百六百七年
千八百六百八年
千八百六百九年
千八百七百年
千八百七百一年
千八百七百二年
千八百七百三年
千八百七百四年
千八百七百五年
千八百七百六年
千八百七百七年
千八百七百八年
千八百七百九年
千八百八百年
千八百八百一年
千八百八百二年
千八百八百三年
千八百八百四年
千八百八百五年
千八百八百六年
千八百八百七年
千八百八百八年
千八百八百九年
千八百九百年
千八百九百一年
千八百九百二年
千八百九百三年
千八百九百四年
千八百九百五年
千八百九百六年
千八百九百七年
千八百九百八年
千八百九百九年
千八百百年
千八百百一年
千八百百二年
千八百百三年
千八百百四年
千八百百五年
千八百百六年
千八百百七年
千八百百八年
千八百百九年
千八百二十年
千八百二十一年
千八百二十二年
千八百二十三年
千八百二十四年
千八百二十五年
千八百二十六年
千八百二十七年
千八百二十八年
千八百二十九年
千八百三十年
千八百三十一年
千八百三十二年
千八百三十三年
千八百三十四年
千八百三十五年
千八百三十六年
千八百三十七年
千八百三十八年
千八百三十九年
千八百四十年
千八百四十一年
千八百四十二年
千八百四十三年
千八百四十四年
千八百四十五年
千八百四十六年
千八百四十七年
千八百四十八年
千八百四十九年
千八百五十年
千八百五十一年
千八百五十二年
千八百五十三年
千八百五十四年
千八百五十五年
千八百五十六年
千八百五十七年
千八百五十八年
千八百五十九年
千八百六十年
千八百六十一年
千八百六十二年
千八百六十三年
千八百六十四年
千八百六十五年
千八百六十六年
千八百六十七年
千八百六十八年
千八百六十九年
千八百七十年
千八百七十一年
千八百七十二年
千八百七十三年
千八百七十四年
千八百七十五年
千八百七十六年
千八百七十七年
千八百七十八年
千八百七十九年
千八百八十年
千八百八十一年
千八百八十二年
千八百八十三年
千八百八十四年
千八百八十五年
千八百八十六年
千八百八十七年
千八百八十八年
千八百八十九年
千八百九十年
千八百九十一年
千八百九十二年
千八百九十三年
千八百九十四年
千八百九十五年
千八百九十六年
千八百九十七年
千八百九十八年
千八百九十

然リ而シテ内國通運ノ事業ヲ起スハ素ヨリ自然ノ富源ニ溯ル之レヲ開墾スルニ至リ主緊至切ノモノナリト雖モ鐵道、道路、運河ノ法方其宜シキヲ得スメ徒ニ臆測妄想ヲ以テ所断スル時ハ亦愚ト謂ハサル可カラズ彼ノペリユ國ノ錢道ヲ看ヨ其方法宜シキニ出テズ地ノ理ヲ謀ラサルカ故ニ到底無用ノ長物ニ属セリ支レ富ハ猶水ノ如シ自然固有ノ法則ニ從テ之レカ出口ヲ需メテ以テ此ニ流出ス故ニ先ツ其出口ニ注意セザル可ラス苟モ富ヲ起サント欲セハ則チ

先ツ一國内ノ物産ノ大中心ハ何處ニ在ル乎スタ自然ニ互市場トナルベキ地勢ハ何クニ在ル乎此二者ニ就テ宜シク地理ヲ考究スヘキヲ以テ肝要トナスナリ且所謂富ナルモノハ必ス其國ニ存在セサル可カラザルナリ而シテ其レ之ヲ利用スルノ策ハ則チ只鋏道、道路、運河ノ位置ヲシテ各其宜シキヲ得セシムルニアルノミ故ニ通運ノ至便開クルノ地利ハ其國土ノ開墾進捗スル所ニ從テ稍自ラ著ハル、モノナリ抑モ鐵道、道路、運河ノ位置ハ物品ヲ産出スル州郡

ト之レヲ消糜スルノ都邑トノ間ノ自ラ其脈相
通スヘキ事情ヨリシテ一層ノ便利ヲ生サン
ヿヲ欲スルノ活眼相開クルニ及テ彷彿始メテ
其宜シキヲ得ルニ至ルナリ
前ニ説キタルカ如ク日本ノ未耕地ハ一千〇四
十四万二千七百七拾二丁アリ其一丁歩ノ地價
ヲ金拾四圓七拾七錢トナストキハ総計地價僅
ニ壹億五千四百貳拾三万九千七百四拾貳圓四
拾四錢ニ過キスト雖モ若シ此未耕地ヲ開耕ス
ルニ及ンテハ則チ其地價金三拾九億五千九百
五十七万五千八百五拾九圓廿四錢トナルベン
而シテ其地所産ノ物價ハ四億六千百貳拾九万
〇五百八拾七圓六拾錢ヲ得ヘシ其内一割五分
ヲ以テ政府ノ税金トナセハ則チ其金六千九百
拾九万三千五百八拾八圓拾四錢ナリ若シ夫レ
地價百分ノ三ヲ以テ之レヲ筭スレハ税金壹億
一千八百七拾八万七千貳百七拾五圓拾八錢ト
ナル而シテ其地主ノ所得ハ百分ノ六ナリトセ
ハ即チ金貳億三千七百五拾七万四千五百五拾
壹圓五拾五錢ナリ其所産費用ハ只金壹倍ゆ

四百九拾貳万八千七百六拾圓貳拾七錢ヲ要ス
ルノミ

其他尚荒蕪地壹千三百。九万。五百六拾丁ア
リ内牧場トナスヘキノ一部分ハ既ニ我輩カ全
國ノ地坪ニ就テ概筭シタルモノト同等ノ比例
即チ百分ノ七ト四分ノ三ヲ得ヘシ是レ荒蕪地ノ内廃
地一千。九拾貳万五千九百四拾二丁ヲ除キ猶
貳百拾六万四千六百。八町アルニ由テ然ルナ
リ而シテ其所謂廃地ナルモノハ嵯峨崢嶸ノ險
地ニシテ耕作ニ便ナラサルカ為メニ開墾ニ着

手スル能ハス又家畜ヲ牧養スルニ由ナキヲシ
テ自ラ其名ヲ命スルナリ

然リト雖モ日本ニ於テ此等ノ廃地ハ槩子山羊
(アンゴラゴート)ヲ肥膃セシムルニ十分適當ナ
ル牧草ヲ生シ且其獸畜ヲ増殖シ之レヲ飼養ス
ルノ天然牧場ト為スヿヲ得斯ル利益アルカ故
ニ山羊牧蓄ニ手ヲ下サハ太タ貴重ナル土地ト
ナルヤ復何ソ疑ハン果シテ然ラハ則チ牧者ノ
資本ヲ費ヤス亡無フシテコレヲ産ス所ノ
利潤或ハ人造牧場貳百拾六万四千六百。八丁

ノ牧蓄費用ヲ悉皆償フテ尚ホ余リアルヘシ而シテ其要スル所ノ費額ハ牧場所産ノ純益ヽ槩算スルニ先ツテ豫メ之レヲ知ラサルヘカラス乃チ英國ニ於テ人造牧場ヨリ毎歳産スル所ノ諸種ノ物質ヲ槩算シテ之レヲ徵スヘシ槩子平均一「アクル」即チ四反〇六歩三四付英貨三磅十「シルリング」ノ割合ナリ是ニ由テ之レヲ考フレハ日本ノ牧場モ亦今日英國ノ丘側ニ於ケルカ如ク其畜類ノ繁盛ヲ見ル相同シキ僅ニ數年ノ中ニアルヲ推知スヘシ然リ而シテ其時ニ至テハ却テ其牧場所産ノ物質ヲ販鬻スルニ就テ大ニ苦慮スル「アルヘシ何トナレハ日本ハ英國及ヒ歐州大陸ト其風俗ヲ異ニスルノミナラス全亜細亜州中ニ於テ牧場ヨリ其需要ノ直接或ハ間接ヲ問ハス其所産ノ物質ヲ消費或ハ利用スルモノ甚タ僅少ナレハナリ例ヘハ馬ヲシテ人或ハ貨物ヲ運送セシムルノ大車ヲ通スルノ道路多カラサルカ為メニ自ラ馬ノ需要モ亦隨テ限リアル等ノ如シ故ニ日本ニ於テ牧場ヲ開クハ之ヲ他國ノ荒野ヲ開テ牧場トナスニ比

スレハ其ゝ〻一數等ナリ第九章ノ表中ニ示シ
カ如ク日本農業ノ迅速ニ盛大ニ赴クノヽニ至
リテハ甚タ大ナル牛馬ノ需要ヲ起ス可シ然レ
トモ此等ノ未耕地開墾ニ着手セサルノ間ハ牧
場アルモ唯羊毛ヲ除クノ外他ノ所産ノ需要ハ
甚タ僅カナルヘシ蓋シ牧場ノ勢力ハ斯ノ如ク
微ナリト雖モ其極メテ日本富饒ノ一大根元タ
ルヤ明瞭ナリ其所産ヲ壹丁ニ付七圓四拾七錢
(即チ英國牧場ノ所産凡ソ六分ノ一ニ當ル)ト見
積ルモ之ヨリ得ル所ノ歳入ハ金壹千五百七拾

三万六千七百圓ヨリ少ナカラサルヘシ且夫ノ
天然牧場ヨリ獲ル所ノ物産ヲ以テ人造牧場ノ
費用ヲ償フヿヲ得ルトキハ則チ人造牧場ノ所
産ハ悉ク兩場ヨリ生スル純利益タルヘキナリ
此純利益ヲ以テ姑ク百分ノ六ノ割合トナスモ
其地價ハ金貳億六千貳百八拾壹万一千六百六
拾六圓六拾六錢六厘トナル而シテ此地價百分
ノ三ヲ以テ地租トナサハ其金七百八拾四万〇
三百五拾四トナリ又此地租ヲ総所産高ノ一割
五分トナストキハ其金貳百六拾万〇三百〇五

圓トナルナリ石ハ則チ今車ノ管見臆測ニ出テタル槩筭ニ過キス故ニ未タ必スシモ敢テ實地ト毛厘ノ差ナシト保スル能ハスト雖モ然レモ若シ苟モ其説ク所ヲシテ所謂中ラスト雖モ遠カラストナサハ豈亦タ暴カニ之ヲ嫌拒スヘケンヤ蓋シ現今耕作ノ情勢ヲ窺フニ日本ノ未耕地ヲシテ開墾ノ域ニ入ラシメント欲スルハ甚タ難シトス既ニ農夫ノ耕作ニ從事スルモノ甚タ夥シクシテ他ノ諸業(工商)ヲ顧ミレハ甚タ寡タタリ余カ已テニ論セシ如ク國産ノ産出ヲ益大ニセントト欲セハ農工商ノ各課ニ從事スル者ヲシテ其平均ヲ得セシメサルヘカラス而シテ余ハ未タ日本ニ於テ其平均アルヲ見サルナリ抑モ日本帝國ハ其已ニ耕耘ニ着ク所ノ地四百〇九万千百十二丁アリ而メ斯ニ從事シテ營業スル者一千五百三拾貳万〇三百九十四人ナリ故ニ其耕ヘス所ノ割合ヲ考フレハ毎一人貳拾六畝(一丁ノ百分二拾六)ニ過キス之ヲ亜米利加合衆國ニ比スルニ余カ曾ヲ陳シタルカ如ク同國ニ於テ諸課業ノ平均一耕作ノ為メニ使ラ

レタルモノ衆國ノ耕地ハ総テ三百五拾七万八千三百九拾二平法里即チ四千五百九拾貳万九千五百四拾六丁ニシテ之カ耕作ニ從事スル者凡ソ千八百貳拾六万。貳百拾三人ナリ故ニ毎一人（十九）耕ヘス所ニ丁五反一五ニ當ル加之ノミナラス亜米利加ノ農夫ハ毎一丁ノ耕地ニ付テ平均五拾四弗八拾壹錢ノ益ヲ得レ氏日本ニ於テハ平均四拾四圓貳拾錢ニ過キス故ニ日本ニ於テハ其農夫ノ一ヶ年ノ平均所産總カニ只凡拾壹圓四拾九錢而已亜米利加農夫ノ毎年平均所

産ヲ見ヨ毎頭（二十）一百三拾七弗八拾五セントノ多キヲ占ムルナリ

日本ノ諸營業者ノ間タニ更ニ均一平等ノ方法ヲ設立セントト欲スルニ方テ爰ニ後タ障礙新タニ萌起スルカ如ク思想スル所ノ諸事情アリ然レ氏之ヲ除クハ豫メ之ヲ慮ルカ如キ難キニ非サル可シ何トナレハ若シ日本ノ農夫ニ就テ亜米利加ノ農夫ニ比較シ其所産ノ劣ル所ノ原因ハ何等ノ点ニ帰スルカト問フニ是レ甚ニ容易ニ除キ得ル所ノ三不利ニ属スレハナリ日本人

ハ其農業ニ從事スルニ方ツテ亞米利加ノ農夫カ幸スル如キ便利ノ機械及ヒ農學ノ発明等兩ナカラ之レヲ裨補スル所ナキモノ其一アリ仮令是等ノ裨補アラシムルモ租税ノ重キカ為メニ其農業ヲ擴充スルノ希望ヲ絶タシムル所ロ甚タ多キモノ其二ナリ日本ノ農夫カ耕ヘス所ノ土地ハ大槩子五穀耕種ノ為ニシテ其勞大ニメ時間ヲ費ヤスモ亦甚シ故ニ其所得モ殆ント全ク無キカ如キモノ其三ナリ然リ而メ適々養蚕ノ為メニ桑葉ノ如キ最モ所得多キモノヽ蕃

殖ニ從事セシト欲スル者アルモ費多ノ規則法例アリテ却テコレニ從事スルモノヽ利益ヲ得ルヿヲ妨碍ス故ニ此際少シク此束縛ヲ解クヿアラハ其成果ハ彼奴隷カ解放ヲ請ケタルト恰モ同一ノ成果ヲ見ルヘキナリ然リ而シテ烟草茶砂糖及ヒ其他二三ノ耕種ニ就テハ全ク問ハサルモノヽ如ク然リ曾テ「ゲヨーンス氏ヨリ余ニ贈レル書ニ曰ク地ヲ耕スニ人力ニ代ヘテ「プロー」牛馬ヲ以テ使用スル犁ヲ用ヒレハ一人ニシテ往時十八日ノ力作タルヽシ事業モ一日ニ耕

作スルヿヲ得旦是マテ開墾ニ着カサル所ノ地ヲ開拓スルニ「プロー」ノ輔分ニ藉レル一人ノカニ因テ一日四反ノ地ヲ耕作スルヲ得可シ之ヲ依然トシテ往日ノ古法ヲ襲フテ之レヲナサハ少クモ三十六日ノ長キヲ要スヘシト且ツ曰ク之ヲ槩算スルニ古法ヲ以テスレハ一個ノ日本農夫十日ノ労カニシテ地一反ヲ深サ一「インチ」ニ開拓スルヿ能ハサルナリ仮令又タ「アイルランド」ノ人ノ如ク天賦骨力強剛ナルモノト雖モ現今日本ニ於テ用ユル所ノ農具ニ催ニ勝リタル器械ヲ以テスルモ十六日ニシテ四反ノ耕地ヲ九「インチ」ノ深サニ耕鋤スルヲ得サルハシ然リ而シテ余輩ハ此事業ヲナスニ要スル所ノ労力ヲ考フルニ及テ曾テ其動作ノ遅鈍何ヲ以テ斯クノ如キカト疑惑セシ所ノモノモ亦復タ怪マサルニ及ヘリ

「サミユール、トブリユ、ヂヨン」氏曾テ「スチユブレル」氏カ著書ヲ引証シテ云ヘルヿアリ曰ク日本ノ谷間米穀ヲ沂種セル田畴ノ地味ニ就テ頗ル殖物質ニ富メル所ノ土塊ヲ秤リテ之ヲ試ルニ

一尺立方毎ニ凡七十磅ノ量アリ則チ深サ壹「フート」ニ付壹「アクル」ノ量三百〇四万九千磅トナル但シ一尺ハ通常當國ニ於テ耕鋤シ得ル所ノ深サナリ是ニ因テ之ヲ觀レハ壹「アクル」即チ四反十六分ノ一ノ土地ヲ耕作スル薄命ノ農夫ハ三百〇四万九千磅ノ重目ヲ開耕シ之レヲ掘起シ之レヲ破碎シ之レヲ整頓セザルヲ得サルナリ合衆國ニ於テハ土地耕鋤ニ牛馬ヲ使役スルモ尚之レヲ厭フテ既ニ蒸氣機関ノ鋤鍬ヲ発明シ以テ之レニ代ヘシムスルニ及ヘリ若シ之レヲ代

用スルニ至テハ凡三割ノ節用トナル而已ナラズ牛馬ヲ蓄養スルノ需要モ亦タ省クヿヲ得ナリ

抑モ蒸氣機関鋤鍬ヲ使用スルノ一大利益ハ之レヲ牛馬ヲ使役スルニ比スレハ牛蹄馬蹄ノ為メニ「スプソイル」（耕鋤セシ土粒ノ抵ノ土ヲ云フ）ヲ踏堅メルカ如キノ患ナシ而シテ機械使用ニ就テノ重大ナル損耗ハ獨リ其費用ト取扱ノ重大ナルトニ過キサルナリ或ハ謂ハン稲田ハ「プロイ」ヲ以テ之レヲ耕鋤スル能ハズ何トナレハ其土 亦子

湿地ニシテ常ニ乾ハシ得ス且ツ馬ヲ以テレハ其土地ヲ蹂躙シ恰モ苗根ヲシテ張テサラシムルニ至レハナリト然リト雖ドモ是等ノ障碍ハ心スシモ除キ難キニ非サルー余輩ハ最モ信任シテ疑ハサルナリ博士「ラファンレ」氏謂ヘルアリ曰リ怨テ是等ノ水田ノ如キ湿地ハ已ニ稲糸ヲ收穫セレ後ニ至テ乾カスヿヲ得ルカ故ニ「プロー」ヲ以テ之ヲ耕鋤スルハ實ニ容ハサルニ非ス而メ又之レヲ乾カモ之レヲ為メニ敢テ後日ノ妨碍ヲ生シ或ハ患害ヲ釀フノ根本タル

事理ナシト何トナレハ復タ之ニ水ヲ注カントト欲セハ田地各々邑分セシ所ノ小溝ヿリシテ自ラ水ヲシテ其中ニ充満セシムルヿヲ得レハナリ

最モ新規発明ノ農具ヲ採テ以テ當國農業ノ欠ヲ裨補セハ農夫ノ作力ハ益々進歩シ田畑耕種ニ従事スル人員ハ却テ非常ニ減少スルハ論ヲ俟タスメ明ラカナリ何トナレハ機械ノ裨補ニ藉リテ土地耕作ノ割合毎一人貳丁五反壱畝五歩ノ平均トナリ之レニ比較スル機械

ノ裨補未タ有ラサルノ時ハ其一人ノ耕スル所ノ只九分ノ一ヨリ僅カニ厘毛ノ上ニ居ル而已然ニハ則チ現今農業ニ従事スル人口ノ三分ノ二即チ一千〇壱万三千五百九拾六人ハ是レ固ニ餘剰ノ人員トナルヲ以テ其人ハ更ラニ各其最モ好ム所ニ應シ貳千五百六拾八万七千百九十四丁ノ新地開耕ニ従事スルヲ得ヘシ此貳千五百六拾八万七千百九拾四丁ノ地坪ハ特リ日本ノ得テ有スル所ニアラス蝦夷流球及ヒ其他発見スル所ニ従テ着手セシムヘキノ地坪ナリ

而シテ果シテ此地坪ヲ得ルニ至ルニ猶此人員ヲシテ農業ニ従事セシムルノ時間ノ餘裕アルヘシ故ニ其時間ヲ以テ佛蘭西「スウヰツツルランド」「デンマルク」及ヒ其他歐羅巴諸國ノ農夫等カ因テ以テ得ル所ノ富饒及ヒ快樂ヲ為スカ如キ工業ニ従事スルヲ得ルノミナラス又今日ノ農夫敢テ怠慢スルニアラスト雖モ日々生計ニ汲々タルヲ以テ曾テ学ヒ得サル所ノ修身学ヲ修シ以テ智ヲ廣ク才ヲ研クノ事業モ亦併セテ之レヲ学フニ十分ノ餘暇アルニ至ルヘシ

斯ノ農業機械ヲ當國ニ使用傳播スルニ心リ数
多人工労力ヲ省減スルト虽ども復タ之レカ為
ニ毫モ不良ノ結果ヲ見ルヿ決シテ之レ有ラサ
ルナリ夫レ人ノ故ニ慣レ旧ニ安ンシテ其
偏見ヲ墨守スルハ世界一般得テ免カレ難ハサ
ルノ風習ナリト虽ども蓋シ支那ヲ除クノ外又日
本ノ如ク其レ甚タシキモノハ未タ曾テ之レヲ
見サルナリ顧フニ此日本ノ旧弊ハ心ス今日ヨ
リ尚ホ貳拾五年乃至三十年ニ歴サレハ未タ全ク
蟬脱スル能ハサリ可キト信スルナリ而ノ其間

人民ノ開化ハ漸ヲ逐テ徐々ニ進歩スルカ故ニ
邦國理財ノ混乱ト其軽ク忘進ニ因テ人民間ニ
蒙ムル所ノ災害トヲ避クルノ餘地ナルヘシ若
シ稼穡一タビ進歩スルニ至レハ人民ノ技巧ト
頴敏トニ因テ能ク粗生物ヲシテ世ノ希望スル
所ノ千種万類ノ品物ニ改良セシムルニ至ラン
例ヘハ砂糖ノ如キハ現今臺湾島ヨリ當國ニ輸
入スルモノ勝ケテ数ノヘカラサルノ多量ナリ
ト虽ども他日農業ノ改良スルニ及ンテハ必ス琉
球薩ヶ及ヒ四國等ヨリ國内人民ノ需求ニ超過

メル額量ヲ産出スルニ至ルヘシ此時ニ當テハ
國内消費ノ用ニ供センカ為メ之レヲ精製セサ
ル可カラズ則チ之レヲ精製センニハ曩日米作
ニ従事セシ所ノ數万ノ人カヲ要セサルヲ得ス
其他生樟脳、生藍、及ヒ烟草ノ如キモ亦然リ而メ
此等ヲ産出スルニ若シ現今施ス所ノモノヨリ
一層改良ノ方法ヲ以テスル時ハ現今存在スル
カ如キ粗製ノ物品ヲ輸出セス必ス精製シテ以
テ支那及ヒ合衆國ノ兩國ニ輸出スルニ至ラン
了果シテ明カナリ加之外國通信ノ増ス

ト牧場ノ利用ヲ企スルトノ兩因ヨリシテ大ニ日
本ヲシテ開化セシムルヿ一端ヲ言ハン盍
シ外國トノ交通増加スルニ至テ興起スル所ノ
工業ハ陶器製造則チ是ナリ牧場ノ利用ヲ致ス
ニ就テ興起スル所ノ工業ハ羊毛等ノ製作茅皮
業、且ツ風俗ノ変遷ニ従テ人民ノ好ム所ノ種々
ノ革製モ亦其形容ヲ異ニスルカ故ニ之ヲ製造
スルノ諸業(譬ヘハ長沓、半沓、鞍及ヒ甲冑書籍装
飾、器類ノ被覆、子袋等ノ類)則チ是レナリ又幸田
ノ蕃殖ハ以テ養蚕ニ従事スル者ノ數ヲ増シ茶

園ノ暢茂ハ以テ製茶ニ労力スルモノヽ資ヲ加フ加之ナラス其茶ヲ包装スルカ為メ材木ヲ鋸割シ且ツ茶箱ノ裏面ヲ密封スルカ為メ鉛錫ノ鑛業モ亦起リ茶箱ノ外部ヲ装飾スルノ紙製造モ従テ興ル可キナリ然リト雖モ或ハ疑問スルモノアラン曰ク諸般ノ物産如斯増殖盛大ニ至ラハ是レヲ消耗スルノ道如何且ツ茶、砂糖、材木、生糸等ハ何処ノ地ニ向テ主顧客ヲ求メ得ヘキ乎是レ甚タ其目途ナキヲ恐ルト余輩ハ容易ノ一言以テ此等ノ疑問者ニ答辨セン曰ク決シテ怖ルヽヿ勿レト

蓋シ日本國ノ位置メルヤ天幸ニ特良ノ氣候ニ居ラシメ而カモ人民順良廉節ニシテ能ク倹約ヲ守リ鋭敏伶利ニシテ能ク勉励ヲ好ムノ人種ヲ保タシム又此天幸ヲシテ大ニ其近隣ニ活用セシムルノ便宜ヲ備フ則チ西ニ支那アリ日本ハ材木、木製ノ物品、毛布及ヒ藍等ノ如キ自國ノ消耗ニ供シテ其餘ス所ヲ彼レニ輸送スルヲ得ベシ抑モ談大帝國(支那)ノ金銀ニ富メル固トニ宏大無量ナリト雖モ収斂政府ノ強求アランヿヲ恐

レテ人民常ニ之レヲ土中ニ埋匿セリ故ニ若シ
一朝彼レカ要望スル所ノ万種ノ物品ヲシテ之
レヲ満足セシムルニ及ンテハ彼果シテ其金銀
ヲ出シテ以テ其好ム処ノ物品ヲ需用スルヿ必
セリ蓋シ該國ノ土地廣ト雖モ地力頗ル衰耗
シ物産ヲ蕃殖セサル所多シ故ニ莫大ノ費用ヲ
要シ多量ノ肥料ヲ施シテ以テ其缺乏ヲ補フニ
アラサレハ該國人民ノ多キ之レカ消糜利用ニ
足ルヘキ所ノ物産復タ蕃殖スルヿナカルヘシ
而メ日本ハ該国ニ最モ近接スルノ國ニシテ彼

其諸物品ヲ需求スルニ最モ便宜ノ基本タ
又東ニ亜米利加アリ其駢々トシテ國勢ノ張ル
人口ノ蕃盛セル固ヨリ日本ト同日ノ比ニ非ス
而シテ日本ヨリ輸送スル所ノ生糸、茶、陶器、及ヒ
砂糖ノ類ハ彼レ皆之レヲ日本ニ仰ク可シ何ト
ナレハ亜米利加ノ地味ハ生糸、茶、ノ両品ヲ産ス
ルニ適セス又砂糖ノ如キモ之レヲ産出シ得ル
モ其収穫ノ量國内ノ消糜ニ供給スルニ充分ナ
ラス且ツ陶土ノ産出スルノ地モ亦甚タ欠乏ナ
レハナリ今日本ヲシテ必互市ヲ開クノ至緊至

要ナル想像ヲ起サシメンカ為メニ余輩ハ爰ニ既往ニ徵シテ以テ將来茶及ヒ生糸需求ノ増加ハ駸々乎トシテ駆スルカ如ク綿々續々他日合衆國人民ノ増加スルニ從ツテ迅速ナルノ結果如何ヲ推考スルヲ要ス抑モ一千八百十年ニ於テ合衆國ノ人口ハ只七百万ナリシモ千八百二十年ニハ一千萬トナリ一千八百三十年ニハ千二百万トナリ千八百四十年ニハ一千七百〇六万九千四百五拾三人トナリ千八百五十年ニハ二千三百拾九万千八百七拾六人トナリ十八百六年ニハ三千一百三十九万九千三百人トナリ千八百七十年ニハ四千百六十萬九千人ニ升レリ而シテ現今其人口ヲ筭スレハ四千五百萬乃至四千六百萬ノ間ニ在ル可シ但シ一千八百六十年ニ於テ全國人口ノ疎密ヲ計筭スルニ全區地幅三百五拾七萬八千三百四拾二平方里ナルニ由リ一里平方毎ニ拾人ト百分ノ拾一トナレリ若シ合衆國ヲシテ伊斯巴尼亜ノ如キ人口ノ稠密ニ至ラシメバ其人口ハ二億ノ多キニ及ハサル可カラス之レヲ佛蘭西ノ人口ニ比較セハ五

億ニ及ハザル可カラズ之レヲ「ベルジム」ノ人口ニ比較セハ拾壹億八千萬ニ及ハサル可カラス人口ノ增殖セサル可ラサル亦以テ知ル可キノミ

帝國(日本)ノ物産ヲ稼穡スルニ改良ノ新法ヲ導ノハ獨リ輸出ノ額ヲシテ多カラシムルノ利益アルノミニアラズ彼耕耘上ニ於テモ亦從テ今日負荷スル所ノ最モ困難ノ重擔ヲ除省シ以テ其肩ヲ息ムルニ至ラン其重擔トハ何ソヤ過當ノ租稅即チ是レナリ蓋シ大藏省ノ計筭ニ據テ日本耕地ノ價格ヲシレハルソ拾五億五千一百二十四万二千百八十八圓八拾四錢六厘ナリ此地價ヨリ割出シ其收獲スル所ノ産物ノ價ヲ一割一分六厘五毛ニ見做シテ一億八千〇七拾四万四千七百拾五圓トス此内政府ニ納ル、租稅ハ四千六百五拾三万七千二百六拾五圓六拾五錢壹厘即チ凡産出高ノ二割五分ト四分ノ三ナリ是ヲ以テ之レヲ觀レハ政府ニ納ル、処ノ租稅ノ重キ亦知ルヘキ而已然リト雖モ現今日本全体ノ形情ヲ顧察スレハ此通幣ハ猶止ムヲ

得サルニ出ツ何トナレハ國事ヲ施行センカ為メニ要スル所ノ國費ハ獨リ賦課シ得ヘキ者ニ就テ之レヲ求メサル可ラス故ニ農夫等ノ力役ハ實ニ辛勞ナリト雖ヒ亦之レニ任セサルヲ得サル所以ナリ然リト雖ヒ若シ土地ヨリ生スル産物ヲシテ余カ既ニ陳述顕示セル如キ方法ニ因テ增殖スルヲ得セシムレハ彼ノ重擔ハ普ク一般ノ全地ノ外面ニ平均配當スルヲ得ヘシ此際ニ方ツテハ仮令國費大ニ增加スルニ至ルモ之レノ供給セサルヲ得サル所ノ人民ノ為メニ其負擔ヲ軽フスルハ自然 理ナリ例ルニ若シ當時ノ日本ノ未耕地二千三百五十三万三千三百三拾二丁ヲ開墾シ一千〇四拾四万二千七百七拾二丁ヲ桑、桑樹、砂糖、穀物及ヒ蔬菜ノ耕種園トナシ残ノ所ノ一千三百〇九万〇五百六十町ヲ牛馬及ヒ羊ノ牧豢場トナストキハ耕種園ノ所産ハ四億六千百二拾九万〇五百八十七円六拾錢ヲ生シ牧豢場ノ所産ハ壱千五百七拾三万六千七百円ヲ出ス而シテ既ニ現今耕種シタル地四百〇九万千百拾二丁ノ所産ハ壱億八千

〇八十二万七千百九十四円六拾銭ヲ生ス此三者ヲ合計スレハ則チ六億五千七百九十五万四千四百八十二円二十銭トナル此合計ヨリ政府ニ納ル、所ノ租税ハ総所産高ノ壹割五分トシテ九千八百六拾七万八千百七拾二円三拾三銭ヨリ此税額ヲ要スル所ノ地ハ現今收税スル所ノ地ニ比較スレバ凡ソ六倍四分ノ三ヲ増加スト雖トモ其税ノ金額ニ至テハ僅カニ二倍ナリシ而シテ課税ノ比較ハ現今行ハル、所ノ税額ヨリモ相下ル五分ノ二ヨリ加之ナラス製造其他種々ノ物品上ニ就テ誤スル所ノ現今ノ税額僅カニ七百〇八万二千二百九拾九円ヲ納ル、所モ亦相顧ミサル可ラス且ツ此工業ノ富根ヲ蓄殖スル丁ハ耕種ノ蕃殖ト共ニ進歩スヘシ而シテ之レカ為メニ工業税ヲシテ平均セシムルヲ必要トセハ則チ工業税モ亦農産税ト等シク相増加セサルヲ得サルナリ此時ニ方ツテ政府ハ特ニ注意シテ工業物農産物ニ就テ平等ニ其税ヲ賦課シテ以テ人民ヲシテ殆ント課税ノ在ル所ヲ知ラシメサルニ至ルヲ要ス蓋シ製

造物品ノ事ニ就テ近頃發行セラレタル烟草税ノ如キ良例ハ余輩未タ曾テ聞知セサル所ナリ而シテ其税ハ實ニ軽クシテ殆ント消糜者ヲシテ之レヲ感覺セシメサルモノヽ如シ希クハ此他一般工業ノ各科ヲシテ猶此ノ如クナラシメ一ヲ然リ而メ帝國各首府ニ鉄道馬車道ヲ敷ク二則チ一般ノ富ヲ増殖スルノ理由如何ニ就テ之レカ考案ヲ立ツルハ甚タ容易ノ事ニ非サルナリ然リト雖ドモ米利加ノ各都府ニ於テ鐵路ノ開クル以来大ニ不動産ノ價ヲ増加セシヲ

回顧スレハ亦其益スル処太ノ宏大ナルヘキヲ臆測スルニ足レリ是レ獨リ政府或ハ府廳ノ東京ニ於テ鐵道ヨリ得ル所ノ歳入ハ二十萬圓ニ下ラサル可シ水樋建設ヨリ得ル所ノ税モ亦甚タ大ナルヽシ蓋シ東京ニ於テ右等ノ如キ工業整頓ノ日ヨリ満五ヶ年ノ後ハ政府或ハ府廳ニ收ムル処ノ歳入ハ六拾万圓ヲ下ラサルニ至ル可シ而シテ右等ノ諸税ヲシテ各人頭ニ配當セシムルニ方ツテハ實ニ只僅少ニメ仮令税ヲ納ル、所ノ人口ハ眼前鉄道水樋等ノ建設アル

ヲ觀又タ現ニ直接ニ此社中ヨリ其税ヲ総括シテ集ムルヲ知ルト雖モ尚殆ント其課税ノ有無ヲ覺ヘサルカ如クナル可シ

斯クノ如ク物産ノ歳入増加スルニ隨テ大藏省ノ收入租税ハ漸次諸般歳出ノ上ニ出ツル固ヨリ論ヲ竢タズメ章々タリ而シテ之レカ為メニ物産試營業中ニ課スル所ノ税ハ最モ寛ニシテ足ル可キナリ此際ニ方ツテハ一般人民ノ負担スル所ノ重擔ハ稍ク減省シ而シテ人民ノ富饒幸福亦始メテ期スヘキナリ

時運ノ変遷人智ノ進歩スルニ従ヒ種稲ノ水田ハ大ニ今日ヨリ減少シ之レニ代フルニ愈々厚潤ノ利益アル諸物ノ耕作ニ從事スルニ至リ而シテ其殘ル所ノ水田ニ就テモ亦今日現在スルカ如キ耕種ノ不十全ヲ觀サルニ至ル可キナリ

嗚呼今日耕種ノ方法其宜シキヲ得サルヨリシテ結果スル所ノ不利ハ人生健康ノ点ニ於テモ亦最モ臭悪ノ泥沼ヨリ迸出スルカ如キ一般ノ傳染毒ニシテ殆ント人命ヲ害スルモノアリト雖ヒ是等ノ悪水ハ将来必ス人家ヨリ迥カニ遠

ノ溝渠ヲ疎注シテ除却シ得ルハ甚タ容易ノ「
ナル可シ而シテ彼是行政方法ノ宜シキヲ得テ
大ニ開明ニ從導スルニ適當シ農家ノ業ハ無益
ノ束縛ヲ離レテ自由ノ動作ヲ得ルニ及テハ則
チ日本ノ耕作ヲシテ最上頂点ノ地位ニ至ラシ
ムルハ果シテ疑ハサル所以ナリ
余ハ思ヘ此等ノ數条ノ問題ニ就テ聊ヽ方案ヲ
立ツルト雖ヒ素ヨリ區々ノ管見而已何ソ必ヘ
シモ充全充備スルヲ得ンヤ故ニ其欠ヲ裨補セ
シカ為メニ更ニ全帝國ノ一見測量図ヲ作ラン

ト欲ス蓋シ其卒業ニ至ルニ非ルヨリハ又焉ン
ソ日本ノ富源ヲ興起スル所ノ開墾ノ「ニ就テ
能ク十全ノ想像ト称スル所ノモノヲ構成ス
ヲ得ンヤ曾テ佛、米両國ニ於テ亦猶現今日本ノ
如キ景況ヲ有セシ時ニ當ツテ夫ノ全國測量圖
ヲ草創スルヲ以テ第一着手ノ要トナシ先ツ地
方ノ測量ヲ為ス「ヲ決議シタリ(佛國ニテハ「カ
タストル」ト唱ヘ米國ニテハ「ランドソルウェート
唱ヘタリ)余輩カ知ル所ニ拠テ之レヲ見レハ萬
端幸福ノ成果ハ皆ナ此本源ニ因ラサルモノハ

未タ之レ有ラサルナリ

佛蘭西ニ於テ特別ナル測量ノ方法ヲ以テ大藏省ニ屬スル事務上ノ最モ緊要ノ一課トナセリ

然リト雖モ佛蘭西ノ方法ハ直ニ之レヲ合衆國或ヒハ日本ニ用ヒテ適當トナス可ラサル而已ナラス却テ其綿密ナル方法ヲ以テ此ニ施スキハ事繁雜ニ渉リテ勞多ク益少ナカルヘシ何トナレハ合衆國或ヒハ日本ノ如キハ之レヲ佛蘭西ノ土地耕作ノ割合ニ比較スレハ大ニ異ナル所アレバナリ故ニ今マ日本ニ最モ適當ト做ス所ノ方法ハ合衆國ノ例ニ倣フヲ以テ良トス是レ大半ノ土地未タ耕作ニ着手セサルノ國ニ用ヒテ大ニ適切ナル方法ナレハナリ抑モ合衆國ノ測量法タルヤ務メテ全國ヲ方形ニ區分ス而ノ其四面ノ方位ヲシテ正直ニ東西南北ニ向ハシメタリ乃チ此書ニ附屬セル四國及ヒ淡路ノ地図ノ如キモ子午線及ヒ緯線ノ縦横ニ因テ作ラレタルモノニシテ英法六里即チ八十七丁九九六ヲ以テ壹區分トナセリ蓋シ大子午線及ヒ大基線ハ天度ヲ測テ定メラレ而シテ其他ノ小

子午線及ヒ小基線ハ「チエーン」及「ソラルコムパス」(測量器ノ名)ヲ以テ測量セラルヽナリ且ツコレニ因テ形チ作クラルヽ所ノ方形ヲ大區(トウンシップ)ト名ツク其各大區中三十六中區即殆ト九千二百九十二丁、六八ヲ包有セリ

地圖上ニ於テ正シク南北ニ列ナル(ヱ、ビ、シ、チ)等ノ本源タル子午線又正シク東西ニ列ナル平行ノ基線ナル(ビ、ビ)ノ基線ヲ見ルベシ是等ノ兩線ヨリ六里(マイル)即チ八拾七丁九八六毎ニ(n.g.t.u.r)光等ナル他ノ數線アリテ三大區ヲ形チ作ルナリ総テ南北ニ置レタル各大區ハ列次ヲ為ス其列ハ各〻本源子午線ノ東或ヒハ西何號ト名ツケラル則チ地圖上ニ於テ東列第一西列第一ト記セリ各大區モ亦各其列ニ從テ之レヲ基線ノ北或ハ南何區ト名ツク則チ地図上ニ於テ「北第一大區」「北第二大區」「南第一大區」等ト記セリ又各大區ヲ別ツテ三十六中區(セクシヨン)トナス其一中區ハ殆ンド六百四拾アクル即チ二百五拾八丁一三ヲ保ツナリ○各大區中ノ區別ハ其數中區一ヨリ起リテ三拾六ニ尽ル其中區ノ位置ハ該大區ノ北

東隅角ヨリ起テ西ヘ一ヨリ六ニ至リ折レテ又東ヘ七ヨリ十二ニ至ル其他之レニ準シテ輪次ニ大區ノ南東隅角ニ在ル所ノ第三十六區ニ至リテ止ム

右ノ一中區ヲ又タ別ツテ四小區ト做ス其四小區ノ一ハ百六十「アタルス」即チ六十四丁五三ヲ保有ス而シテ又之レヲ四分シテ各四拾「アタル」即チ十六丁一三ト作スナリ少ノ美良ノ方法ヲ以テスレバ土地ノ最小區分ト雖モ一目瞭然タルヿヲ得ベシ例ヘバ本源子午線ノ西列第三北第二大區二十五中區北西小區ト云カ如シ

子午線ニ原ッヒテ大區ヲ方形ニ圖畫スルニ方リテハ多少ノ差ヲ生セサルヿ能ハズ何トナレハ各子午線ハ両極ニ近寄ルニ從ヒ自ラ集合スルモノナレバナリ故ニ各大區モ亦緯度ノ高昇スルニ隨ヒ自ラ多少不等遏平行方形ナラザル可ラス之ニ由テ各中區ハ凡ソ六百四拾アタル即チ二百五拾八丁、一三ヲ保有ス乃チ各大區ノ外線ハ六里乃至八拾七丁九九六ヨリ多キモアリ亦尠キモアル可シ尤モ多少増減ノヿニ就テ

別ニ其中スル所アラントス而シテ斯ル大區ニ於テハ其中區或ハ半中區ノ西或ハ北ノ列ニ就テ之レカ増減ヲナス何トナレハ其惑ヤ必ス東ヨリ西ニ或ハ南ヨリ北ニ至ルノ諸線中ニ在ルヲ以テナリ

基線ノ北ニアル各大區ハ其基線ノ起リシ所ヨリ隨テ北ニ至レハ隨テ幅員狹隘トナリ六里或ハ拾七丁九九六以下ニ及フナリ又隨テ南ニ至レハ隨テ幅員廣大トナリ六里或ハ拾七丁九九六ノ以上トナル○定位ノ諸平行線即チ改定シタル所ノ諸線ハ子午線ノ集合ヨリ生スル所ノ差ヲ更ムルカ為メニ凡ソ定リタル間隔ニ於テ設ケラルヽナリ而シテ土地ヲ實測スルニ方ツテハ則チ真正ノ子午線ニ從ハサルヲ得サルカ故ニ斯ノ改定ノ諸線ハ亦其測量ノ精密ナラサルニ因テ生スル所ノ差ヲ明析スルノ要ヲナスナリ例ヘハ斯ル改定ノ諸線ハ本源基線ノ北ニ在ル時ニ方ツテハ自ラ北ニ在ル所ノモノヲ測量スルノ基礎トナリ本源基線ノ南ニ在ル時ニ方ツテハ自ラ其南ニアル所ノモノヲ測量

スルノ基礎トナルカ如シ子午線ノ集縮離伸ハ
此改定ノ諸線ニ至テ止マリ夫ヨリ再ヒ各大區
其適當ノ幅員ノ襲子テ起量スルナリ故ニ大區
ト中區トニ真假二様ノ隅角アリ一ハ實際測量
ノ終ル所ノ隅角(真)ニシテ一ハ測量ヲ起ス所ノ
定位隅角(假)即チ是ナリ測量ノ基点ヨリシテ大
區中區ヲ測量セントスルニ當ツテハ其機械カ
ラ及フ所ニ突出スル目標(高山大樹ノ類)ニ至ル迄三角
方ヲ用ヒ是ニ由テ其目標間ノ里程ヲ注目計畫
シ且ツ之レヲ延長ス是レ其測量線ノ漸進スル

ニ従テ其州郡ノ風土記ヲ作リ且ツ山ト山トノ
間タニアル所ノ溪谷ノ地坪ヲ概算スルノ基本
ヲ求ンカ為メナリ然ルトキハ茲ニ自ラ種々ノ
明細量地圖ヲ作ルニ至ルヘシ
大區中區小區各其經界ノ位置ヲ示ス所ノ子午
線及ヒ基線ノ量地図ニハ水流、洞、丘、岳、地質、材木、
礦物、等ヲ細記スルニ至ルヘシ
定位ノ平行線即チ改定諸線ノ量地図ニハ大區
中區小區ノ隅角ノ位置ヲ示シ且ツ測量線ノ進
ム所ニ従テ其國ノ子午線及ヒ基線ノ位置ニ適

スル風土記ヲ編成スルニ至ルヘシ

大區ノ外線ヲ表ハシタル量地圖ニハ線上ニ隅角ノ位置ヲ示シ且ツ前条ニ陳述シタルカ如キ風土記ヲ編成スルニ至ルヘシ

大區ヲ中區小區ニ區分シタル量地圖ニハ其線尾ニ水流ノ屈曲ヲ示ス所ノ明細書ヲ附録ス可シ

此等ノ明細書ニモ亦注意シテ測量線ノ進ム所ノ土地ノ高低ヲ細記スルニ至ルヘシ

各中區ノ線上ニアル材木、下生ノ樹木、地面、地質及ヒ礦石ノ諸表ハ能ク其區分ヲ立テヽ明細書ニ編次スルニ至ルヘシ

測地術ノ量地書ニハ総テ三角術、高低角術及ヒ平面術等ヲ細記スルニ至ルヘシ

余輩ハ九州四国日本ノ三島ヲ測量スルニ方ツテ基線及ヒ子午線ヲ五種ニ定メン日ク九州日ク四國日ク京都日ク東京日ク仙臺是ナリ而シテ四國ヨリ基線及ヒ子午線ノ測量ヲ創ムヘシ

此際ニ當リテ余輩ハ日本人ノ三角量法、大數比例ヲ熟知セシ者及ヒ地質學、鑛山學ヲ習得シタ

ル者數名ト共ニ從事セントス○此基線及ヒ本源子午線及ヒ一二ノ大中區ヲ測量スルニ凡ソ六八月ヲ要スヘシ蓋シ其間同行ノ日本人ノ内或ハ既ニ觧ク大中區ノ經界ヲ測量スルノ方術ヲ會得シテ之レヲ充分擔當スルモノアラン此時ニ至ラハ則チ余輩ハ大中區ヲ測量スル為メニ更ニ此人ヲ分派シテ四隊トナシ以テ其測量ヲ掌テシメン而シテ此四隊ヲシテ斯ニ從事セシメシ後ハ余輩ハ他ノ日本人ヲ率ヰテ京都ニ至リ復タ其線及ヒ本源子午線及ヒ一二ノ

ヲ測量スルニ從事セン而シテ斯ニ於テマ亦四隊ヲ分派スル者猶四國ニ於ケルカ如クシテハ其大中區經界ノ測量ニ從事セシメン然ル後チ余輩ハ東京ニ來テ四國及ヒ京都ニ於テ着手セシト同一ノ順序ヲ以テ斯從事シ其他ノ土地モ亦然カスヘシ此順序ニ拠テ之レヲ着手スルトキハ數組速カニ量地ノ事業ニ從事スルヲ得ヘシ

大區及ヒ小區ノ經界ヲ測量スル一隊ノ人員ハ測量器ヲ取扱フモノ一名風土記ノ編者一名淮

大藏省

ヲ遮ル所新小ヲ芟夷シ且ツ標堤ヲ築クモノ
六名トス
各縣ニ於テ測量シタル所ノ畠地圖書ノ寫ハ総
テ其縣々ノ地方官廳ニ備ヘ置クヘシ又之レヲ
借ヘ置ク所以ノ者ハ各縣ノ人民ヲシテ其廳ニ
至リ各々其所有地及ヒ其位置ノ如何ヲ知ルニ
便ナラシムルナリ又各縣ニ於テモ必ス測量家
一カルヘカラス是レ何人モ一キス一二
ヲ借ラントスルヲ願出スルトキニ方ツテ其

ヲシテ願人ト共ニ其要望スル所ノ土地
ノ願人好ム所ニ從テ之ヲ一ノ坪數
ニ區ヘセムヲ要スルカ為メナリ

大藏省

番語記

大清